

市民の手で文化のみえるまちづくり

姫路文連 ニュース

季刊 2020年 春号

編集・発行
姫路地方文化団体連合協議会
(姫路文連)事務局

〒670-0083
姫路市辻井5丁目5-36
(姫路労音内)

姫路地方文化団体連合協議会会報(第49号)



마음을 피우다 (心を咲かす)
(韓紙、水彩 / 한지 수채)

パク・チュヌ

関連記事 3頁

令和2年度姫路文化賞受賞式

2019年12月8日(日) 午前11:30~

鹿島殿 慶瑞の間(2階)にて



187名という大人数での開催となり、広い会場も満杯状態。まさにお祝いムード溢れる中、受賞式が行われた。姫路文連からの花束贈呈、記念撮影の後、金素栄さん監督のドキュメンタリー映画「ルートヴィヒに恋して」のデモビデオの上映で、姫路労音「第九」に関わる方々の様々な思いや情熱の一端に触れることが出来た。その後、深江亮太さんの素晴らしいフルートの演奏に心満たされ1部を終了。2部は、坂東顧問発声の乾杯に始まり、歓談、受賞者の方々のご紹介・ご挨拶と続き、予定時間に迫られながら、何とか恒例の「お祝いの餅つき」にたどり着き、おいしい笑顔のうちに開きとなった。

第54回

姫路文化賞

高見 國一(刀工)

吉田 純一(美術)

文化功労賞

久保 一人(地域文化研究)

福本 子(文学)

特別賞「国際文化交流」

金 素 栄(映画監督)

第37回

黒川録朗賞

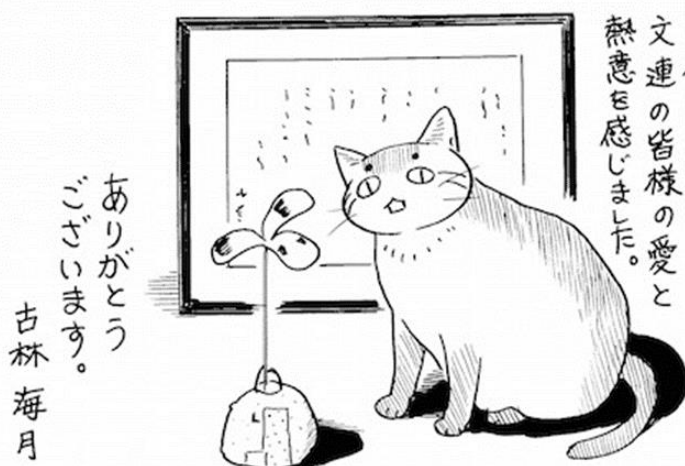
北山真佐子(文学)

東影 智裕(彫刻)

深江 亮太(洋楽・フルート)

古林 海月(漫画)

今 思うこと その1



ありがとうございます。
ございます。

古林海月

文化にかける
文連の皆様の愛と
熱意を感じました。

受賞式も賞状も
トロフィーもすべてが
アメイジングでした。

姫路地方文化団体連合協議会 2020 年総会

総会は2月9日午前9時15分からホテル姫路プラザで開催されました。会長あいさつ、議長選出、2019年活動報告、2019年会計報告、会計監査報告、2020年活動案提案、2020年予算案提案、2020年役員案提案、閉会あいさつ。議事は順調に進み拍手で採択されました。

施設見学ツアー4月、6月からの茶座の再開、60周年記念事業、姫路文連60周年記念誌[播種Ⅲ]～播磨の文化を紡ぎ拓いた人たち～の発行、運営体制の強化、会員拡大、文化ネットワークづくり、提言活動(文化のみえるまちづくりをめざして)芸術文化政策提案、文化行政への提案(新文化センターに関して)、行政当局との定期的な懇談が全会一致で採択されました。

総会記念講演会は、坂本直義氏(ギャラリー ランズエンドオーナー、建築家/1級建築士/CG デザイナー)の[古典とマンネリズム芸術の視点から見た現代美術(ファッション)]は、パワーポイントを駆使して、豊富な映像と解説で大変興味深く説得力があり、まさに文連総会にふさわしく有意義な学びの講演会でした。

懇親会では、お酒と食事をしながら、和やかな集いになり、今年健康と活躍を誓い合う楽しい懇親会となりました。

副会長 松本英治

沖縄公演報告

民族歌舞団「花こま」
藤尾千恵子

2/19～3/14まで、今年も沖縄公演に行きました。

沖縄でもコロナウイルスの影響があり、公共施設の使用が禁止され、公演が3ヶ所キャンセルになりましたが、保育園や学童保育では野外での公演が実現し、元気な子どもたちの笑顔や歌声に清々しい春を感じ、新たな息吹をもらいました。

先生たちとは、ソーラン節のワークショップや食事交流をとおして、例年以上に交流を深めることができました。

また、毎年地域の皆さんに声をかけて公演をしてくださるご一家が、日頃気にかけておられる知人を自分のお家に招き「餅つきホームパーティー」をして交流するなど、いずれも工夫を凝らした公演づくりになりました。

公演のない時間には、つながりのある方々を訪ね、花こまの新しい作品「沖縄を想う」の内容へのご意見を頂いたり、沖縄の三線や太鼓の稽古をしていただくなど一緒に作品づくりをすることができ、私たちの大きな力になりました。

コロナウイルスの関係で、今年は辺野古など座り込みの現場には行けませんでした。沖縄の皆さんとゆっくり話合う時間がもて、新たな関係を築くことができたと思います。



播州労音アニバーサリーフェスティバル



オープニングは内海繁さんが姫路労音に贈って下さった
「はりま野の夜明けのうた」

姫路労音は1954年に誕生し、創立65周年を迎え、記念企画の「播州労音アニバーサリーフェスティバル」を開催しました。姫路労音の創立後、播州地域に労音が誕生し共に励まし合い歩んできました。65周年は播州労音の歴史でもあるのです。

思いがけない新型コロナウイルスの影響がありましたが、遠く北海道や、埼玉・東京から仲間が駆けつけてくださったことは大きな励みとなりました。舞台では様々なサークル、グループ等の方々が、明るく元気に日頃の活動を精一杯表現され、集える時間と触れ合える場を持つことができ、文化・芸術がいかに生活を豊かにしてくれているかを実感しました。

オープニングセレモニー



パク・チュヌさん チャリティー絵画展

3月21日～28日
姫路労音事務所

パク・チュヌさんは、韓国民族芸術団「クンドゥル」の舞台美術の担当者で、播州労音65周年、事務所移転1周年にあたり、チャリティー絵画展のために作品を贈ってくださり、20日に事務所でオープニングセレモニーを行いました。

パク・チュヌさんが来日される予定でしたが、コロナの影響で、クンドゥルと姫路労音をインターネットで繋いでのセレモニーとなりました。労音とクンドゥルの熱い友情の歌「美しい人間が」の合唱で開幕し、橋本事務局長のあいさつ。加古川労音の会員で韓国京畿民謡伝授者の糟谷尚子さんの韓国民謡「アリラン」と、民族歌舞団「花こま」の「秋田大黒舞」の演奏、手作りのお菓子で祝いました。

パク・チュヌさんは「クンドゥルと労音が10数年築いてきた絆が今日の絵画展を実現してくれました。野花はありふれた花ですが、ある日ふと咲き始めて、私たちの心の中にも花を咲かせてくれます。そのたくさんの花たちが一緒にハーモニーを創っています。国や言葉、考え方が違うたくさんの人々が世界には住んでいます。今回の絵が、春の陽ざしのように温かさや優しい気持ちを広げ、お互いの心に満ち、世界に平和の花を咲かせることを願っています。」と話されました。絵には花をモチーフにしたものが多いです。

期間中 120 人余りが訪れ、お茶をしながら和やかなひと時となりました。

姫路
労音
65
周年記念

緊急事態宣言の下 ―文化の現場から―

緊急事態宣言が全国に拡大され、様々な活動の自粛だけでなく、「不要不急の…」等、個人の行動もいちだんと厳しく制限を要請される中、文化に関わる人々や団体も大きな影響を受けています。その今の状況、今の思いを寄せて頂きました。

労音での新型コロナの影響

姫路労音 築谷 治

播州には姫路・宍粟・赤穂・加古川・三木の5市に労音があり、活動を展開しています。非常事態宣言が出され、文化施設・公民館などの使用ができなくなり、4月に予定していたほとんどの例会は延期することになりました。

また、合唱団や各教室(ギター・和楽器・韓国サムルノリ教室 etc.)などのサークル活動も練習会場が使用できなくなり、5月6日までは休みかまたは、延期になりました。延期や変更にとまなう、参加費の払い戻しも発生し、新たな宣材の印刷代や電話代など出費も加算しています。

ドイツのモニカ・グリュッター文化担当大臣は「文化は好調な時にだけ許される贅沢品ではない。それを欠く生活がいかに味気ないかを、私たちは今、目のあたりにしている」と発言し、芸術家と十分協議して、この苦境への対応と補償に当たりたいと決意を表明している。

私たちも世界の先進的な取組に学び、多くの団体と連携・連帯を深め、この難局を乗り越えていきたい。

経済優先社会を変える契機に

姫路市民劇場 加茂田陽一

新型コロナウイルスの猛威は世界中に拡がり、日本でもあらゆる業種において甚大な被害を受けています。私たちの演劇鑑賞運動も全国の多くの組織が存続が危ぶまれる事態に陥っています。

姫路市民劇場も四月十二日に予定していた例会を中止しました。次の六月例会の開催も確信が持てない状態です。高齢者の会員が多いため、「密室空間のホールに行くのが怖い」「家族から反対される」等の理由で退会者が相次いでいます。このままでは四十五年続いてきた姫路市民劇場も存続の危機を迎えるのは時間の問題です。

衣食住が足りてこそその芸術・文化というのが今の日本の現実でしょうが、衣食住と同じく芸術・文化も人間社会の営みには必要不可欠なものだということを、多くの人に再認識して欲しいと切に願っています。

民族歌舞団「花こま」の現状

民族歌舞団「花こま」代表 藤尾千恵子

予約されていた3月から5月の公演がキャンセルになり、6月の学校公演も来年へ延期などで月々の運営費が出ない状況が続いています。財政的には現在、今までの蓄積分を使い運営していますが、6月から運営できなくなります。例年4～5月は、今年度の公演をお願いしてまわる時期でもありますが、訪問することもできず、また受けてくださる側も今後の見通しがもてず、公演日程を決めかねる状態で、身動きがとれない状況にあります。この間にできる稽古をと思いますが、練習場所も確保できません。芸能や音楽文化に携わる人はみんな同じだと思います。国には、自粛に対する補償をしっかりとっていただきたいと思います。

「2020 ひめじアーティストフェスティバル」中止のお知らせと、来年への課題

ひめじアーティストフェスティバル実行委員長 円司(えんじ) 宮川 真一

5月15・16日に開催を予定していましたが、「2020 ひめじアーティストフェスティバル」は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止を決定致しました。ここまで多くの方にご協力を頂いたことに、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

もちろん来年も開催を予定していますが、イベント開催としての大きな課題が2点あります。1 つ目は、会場使用の許可が下りるのが、イベント開催の50日ほど前であるということです。実際の出展者募集は、半年前からスタートするので「きっと会場を使用できるだろう!」という希望観測的な状況で準備を始めているような状態です。

そして2つ目は、今年から発生した会場費の問題です。シロピア記念公園を4日間借りて32万円を姫路市に支払います。(実際は、44万円ですが、30%の補助金があります。)イベント自体は、出展者の出展料のみで運営していますのでとても厳しい状況です。昨今の経済状況から見ても作家の出展料を上げるのも、出展者減のおそれがあるので、とても慎重に進めていかなければいけません。

そんな課題はありますが、今年中止になってしまった分も、来年には盛大に開催したいと思っています。またみなさまの引き続きのご支援よろしくお願い申し上げます。

私から見たクラフトマンの現況

銀細工 内藤 伸也

今回の新型コロナウイルス感染拡大のため多くの作品展・イベントが中止になってしまい、経済的にも精神的にも厳しい状況が続いています。

そんな中最近感じていることなのですが、ここ数年沢山の手作り作家さんが増え、色々な活動されています。それ自体は凄く良い事です。が乱立状態にあり飽和しているように見えます。その中で利益を出すために皆さん努力を重ねていると思いますが、なかなか結果が出ないからと言って、価格帯を安くするとか、既製品を組み替えて販売する方もおられたりするので、誇りと責任を持った作品を高いと感じさせてしまったり、手作り作品の定義をあやふやにさせてしまう懸念があることを 残念であると思っています。

私自身、まだまだ一人前ではないですが、銀が好きで出会った仕事なので沢山の人と関わり、「衣・食・住」同様に生活の中に、あたり前にあるものとして浸透し、沢山の方に一からコツコツ創った作品を見て触って楽しんでいただき、本来のモノづくりの良さを知ってもらえるような活動をしていきたいです。

新型コロナウイルス禍の下で起きていること

内海知香子

【姫路シネマクラブ】

シネマクラブは新型コロナウイルス感染防止のため、まず3月例会『神宮希林 わたしの神様』を中止し、本来予定していなかった6月に日程を変更し開催することにしました。さらに政府の緊急事態宣言を受けて、5月例会も11月に振り替えを決定。

また6月例会は会員同士ができるだけ密着しないよう、席を空けて着席できるように、通常2日間6回上映のところ、3日間10回上映として開催する予定です。

姫路シネマクラブは年6回、奇数月に例会をしています。会費は偶数月に前納(基本は郵便局の口座から自動引き落とし)となっているため、今回、3月例会の会費は2月に既に納入済みですが、5月例会の充当

する4月の引き落としは停止。今年度は年5回例会を開催する方向で運営していこうと思います。

経費にかんしては、会場費(姫路キャスパホール)、映画の上映料ともにキャンセル料はゼロ。したがって今回の件でマイナスとなった経費は3月、5月例会が掲載された会員募集用のチラシが無駄になったこと、また6月例会の日程を通常より一日増やすことで会場費が余分に必要となりました。現在のところ、姫路シネマクラブは財政に比較的余裕がありますので、この程度のマイナス、余分の出費は大きな痛手とはなりません。しかし、このまま例会が開催出来ない＝会費納入がゼロとなれば、事務所の家賃、専従者の人件費など維持費が大きいのしかかることになります。

さらに、例会が行われないということは会員を増やす機会を無くすということでもあります。同時に今いる会員に退会のきっかけを与えることにもなります。ふだんでも病気や転居等、様々な理由で毎例会、退会者は一定数存在します。新たな会員が増えなければ組織はジリ貧になっていくわけですが、今回の件で大幅な会員数の減少に見舞われないか…。大きな不安に襲われています。

【櫛兵庫県映画センター】

シネマクラブに映画を配給し映写をしているのが、筆者が勤務する櫛兵庫県映画センターです。映画センターは、劇場公開が終わった映画作品を映画館以外(＝非劇場)に配給・上映する会社で、初代社長が創業してから50年、株式会社化して40年が経ちます。今は社長と私を含む3名の社員で兵庫県下、年間350～380件の上映会を請け負っています。

主な取引先は公共ホール・行政・学校ですが、政府による新型コロナウイルスによるイベント自粛・休校要請が出た2月末から全県でキャンセルが入り始め、3月は28件あった仕事のうち27件がキャンセルとなり売上は昨年同月比マイナス99%。収入は100分の1になりました。4月も13件すべて、5月、6月も続々とキャンセルの連絡が入っています。

3月は社長と社員の給料を50%カット(ですが私は世帯主ではありませんので例の30万円は支給対象とはなりません)。4月は未定です。会社としては、これまでの蓄えを取り崩して維持費を支払いつつ、社長と経理担当者が各種金融機関からの借り入れ、雇用調整助成金給付の手続きに奔走しています(ちなみに政府が発表した中小企業向けの200万円の給付はまだ具体的な骨格は何も出来ていないそうです…。)しかし順調にそれらの手続きが終わっても実際に入金されるのは早くも2～3ヶ月先です。果たしてそれまで会社が無収入のまま持ち堪えることが出来るのか…。この状態が夏以降も続けば倒産が現実味を帯びてきます。

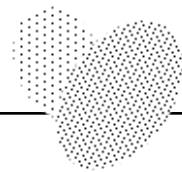
映画界全体としても、製作会社、配給会社、映画館、いずれも大手以外は我が社と似たような状況にあると思います。今後、コロナ禍が収まり映画館が再開しても公開する作品が無い、映画が出来上がっても公開する映画館が無い、才能ある人材が映画を作る場と発表する機会を失うことで映画界から去っていく、という事態が世界中で待ち受けているのではないかと恐れます。そうなれば、たとえ将来、我が社が持ち堪えていたとしても売れる商品＝作品が無くなるわけです。

ライブハウス、飲食店、演劇・音楽に関わるアーティスト、イベント会社など、国や自治体による「補償の無い自粛要請」によって苦境に陥っている各業界の悲鳴にも似た声はメディアを通じて皆さんの元にも届いていると思います。しかし、映画センターのような文字通りニッチマーケットで生きている企業の声はなかなか表に出る機会はありません。

星野源の歌声動画の隣で、紅茶を啜り犬と戯れながら「家に居ましょう」と国民に呼びかける愚昧な宰相の冗談のようなツイッター動画を横目に、私は今日もキャンセル処理と、秋以降は終息していることを信じて上映会を申し込んでくれるお客さんのために家を出て会社に行きます。



今 思うこと その2



徒然に思うこと

岡田礼位子

そもそものが、です。私は終わったものが好きなのです。朽ち果てる寸前のものに心を寄せます。いえ、正しくは惹かれる吸い寄せられる、と受動態で表現するほうがしっくりきます。また逆に、そのような事態にあるものが、私の周りに集まります。私はそれらを愛で慈しみ、そこに深い安堵を覚えるのです。

生まれたときから何かしらが常に終わっていました。黒く古い家、静かな庭、誰も踏むことのない飛び石、そこに射す動きのない陽だまり。終わりを迎えたにも関わらず淡々と日夜明けるようにのっぺらぼうにも続く家族。ただ住まう場所となり果てた城下町。遊び場は廃墟となった近所の工場、家の中では古い物置の中で息を潜めながらそこにある物をじっと眺める。そんな中で覚えた胸を締め付けられるような感覚が、いつの間にか快感に変わっていったのだらうと思うのです。

このような私に、原稿依頼が舞い込みました。依頼主は姫路文連さん。そこで、そもそものが、です。斜陽に傾く私になぜ、と。

思い起こせば、生ある物の静けさを美しく描き出す絵描きさんから、入会いかがとにつこり誘われたのが始まりでした。受動態の私はまたにこりと入会書にペンを走らせました。それだけのことでしたがこうなると私は、文連さんの歴史も知らなければそこに携わる人もその活動もほとんど知らないことに気が付きました。だから思うことを書いてみてと言われると、はたと立ち止まり。

文章とて己の一部。いつ誰に何をどのように伝えるのか分からないまま、自分の徒然を画用紙一杯に描き出す無垢な子供の無邪気さと勇氣ほどのものは持ち合わせていない。そこで、斜陽から抜け出せない私が、この世の美を追求する文連さんへ、さて何を書くのだろうか、そういうことになるのです。

だいたい、です。よく見ると私達は終わったもの、終わりつつあるものに囲まれています。この文章だって私のある日の脱け殻。絵も音楽も、経済活動も政治活動も、旧知の作品や歴史はすでに終わっています。ただ、終わったものを見ている自分は生きています。終わった物に心惹かれる私が、何となくやることなすこと、はらはらと胸のときめき。それが瞬時に過去になる刹那。少なくとも自己愛のある者ならばそこにさりげなく美を見出だしたいと思うのは、人間の欲望として否定されるものでもなく。理論や技術の成熟さを求めつつ和を乱すことなく、それでいて自分の軌跡となる美しさ。生きているという瞬間的な事実と恒久なる美への欲望が、結局は何事かをしでかしてしまう、その積み重ね。

なんだかね、懲りもせず。ただし私が感じ考え行動することは、たいてい過去の誰かがしてくれている、だから安心。安心して感じるままに委ねてもいいと無責任に思っていたりするので。

でも、決定的に違うのは、私は生きているということです。これほど不思議で面白いものはないと思います。終わったものも、命ある私の眼を通すと完全な終わりではなくて。だって「それは見られている」という主語となり甦るから。だからずっと見ていてあげる。終わらせたくないものは何なのか、なぜ終わらせたくないのか、終わらせないようにするにはどうしたらいいのか、止まるはずのない時間を止めるように、じっと眺め考え続けてしまうのです。

つまり、私が文章を頼まれて何かを書いたところで何も新しいことはなく。連綿と続く歴史と自分だけの時間の交差するところは、ゆえに我あるのみ。いつかは必ず過去になる私から皆さまへ、これからもよろしくお願いいたします。